



石川淳研究 : その思想と想像力の軌跡 (二〇二三年 度修士論文要旨)

伊藤, 日依梨

(Citation)

國文論叢別冊, 2:23-24

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491576>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491576>



石川淳研究

——その思想と想像力の軌跡——

伊藤 日依梨

本論文では、石川淳の政治的関心と文学的関心の接続の仕方について問題を設定し、アナキズム、生命主義受容を明らかにしつつ、それを補助線とし、「紫苑物語」「修羅」「荒魂」においてどのような文学的実践が行われているのか検証した。

石川淳はアナキストであるとは一般的にはされるが、その思想がどのように形成されたのかについては、これまでつまびらかにされてこなかった。本論文では、大杉栄の書物や百瀬二郎との直接交流を通じて、クロボトキンやシュティルナー、ベルクソンの思想に触れ、生の哲学のブームの影響を多分に受けており、その文脈でアナキズムを摂取し、「雑種の思想」を形成していったことを指摘した。

石川は政治的関心以前に、「虚構とは何か」という、それはそのまま小説家としての「自己とは何か」という実存的な問いを意味する文学上の問題を抱えていた。それは、「佳人」「普賢」といった、文芸復興を背景としたメタフィクションから小説家としての出発があったことから窺える。その試みは戦後直後の「無尽灯」において一つの達成を見る。「無尽灯」において、分裂した自己はそれぞれ高邁な精神を担う「わたし」と軍国主義に染まりゆく「みみっちい日常」性を担う「弓子」に仮託される。「わたし」は「日

常性のなかに完全に埋没することで、逆に日常性を断絶」しようとし、結局その試みは失敗しているのだが、そのようなラディカルな行為が描かれているところにこの作品の到達点があり、この「否定のエネルギー」の論理は「紫苑物語」「修羅」「荒魂」においても形を変えて、継承されている。

第一章「紫苑物語」論——生命主義とアナキズム——では、本作の幻想性が何に由来するものであるか分析した。従来の研究では、主人公宗頼の精神的格闘を論じるものが多かったが、本稿では、「おのづから」と「みづから」という副詞に注目し、西田幾多郎の主客合一論や親鸞の絶対他者の思想が本作に取り込まれていること、作中人物の獣性にアニミズムが見て取れること、そうした背景に、生命主義受容があることを論じた。また、生命主義と歴史的に見て結びつきの強いアナキズムが作中のユートピアの描写に表出しており、柳田国男の民俗学とも共鳴していることについても論じた。このような作者の生命観、自然観が、本作の孤高の幻想性を築き上げている。

第二章「修羅」論——乱世を描くこと——では、本作の主人公胡摩の革命が結局は失敗に終わることに焦点を当て、石川が戦後、「無血革命」が果たされなかったことに対して歎きながらも、「われわれは絶望的にあきらめませんよ」と言い放ったことと重ね合わせながら、文学を書き続けるという営為が、革命を持続させるための実践であるということを述べた。従来の研究では、本作は〈正史〉批判の文脈で読まれることが多かった。本稿では、それを引き受けつつも、作中に、事実上の人物のみならず、名もなき虚構上の人々が複数登場し、「血のかよった人間」として、生き生き

と運動しているところに着目し、その無秩序性にこそ意味があること、また、それを描き切るには、虚構に史実を取り込む必要があったこと、その中でも乱世を舞台に選ぶ必要があったことを述べた。

第三章『「荒魂」論——現代都市に息づく神話』では、従来の研究が主人公佐太とはなにかという問いに答えていくことに終始していたのに対し、現代都市が作中においてどのように描かれているのかに注目した。そして、その現代都市という舞台に神話的人物、佐太を登場させることの意味について考察した。そのために、まず、佐太がどのような人物であるのかをあらためて分析し、その上で、石川の都市やサディズム・マゾヒズムへの関心をこれまた都市と人々の欲望を描いた戯曲「おまへの敵はおまへだ」と「一目見て憎め」と比較しながら確認していった。また、同時代評で酷評されていた、クライマックスの失敗、後半部にかけての失速について、先行論では十分な意味づけがされていなかった。本稿では、これについて、石川の散文観に照らしながら、作者の晩年の長篇『狂風記』などの作品に繋がっていくような試みのあらわれとして意味づけを行った。上田秋成の江戸読本に見られるような簡潔な文体、地の文のレベルでの感情移入の禁欲、民俗学の導入といった試みが、持続的な文学かつ石川が志向したロマンを実現させるものであったということである。このようなロマンの追求は同時代の世界的な動向と連動していた。たとえばブランショは、文学を自己否定することによって文学概念を問い直そうとしたが、石川の文学的実験はそれと軌を一にしているのである。特に民俗学を文学に導入するという方法は、石川の後継作家ら

に大いに影響を与えており、石川は現代文学の主題やモチーフを用意した点において、文学史上、重要な作家である。

以上から見てくるのは、石川の書くという営為が、散文のたゆまぬ追求という文学的主题と、人間の自由のための持続する革命への志向という政治的な主題を併せ持っているということである。

石川にとつての政治的主题とは、大正生命主義、大正アナキズム由来の生命の絶対的肯定である。それを、「個」と自然を重ね合わせることで可能にしている。作品においては、自然そのものであったり、神であったりする超越的な力を取り込むことによって、「因縁」や「悪運」といった個人の自由を縛るものに對抗しようとしている。

散文の追求とは、史実や民俗学を作品に取り込み、想像力豊かに自在に描くこと、後期にかけて、作品を長篇化させていくこと、物語をあえてカラストロフィに終わらせることなどであり、それらをもつてして、次なる作品に繋げていく、つまり、同一のテーマを変奏させながら、書き続けることである。文学とは何か、個人の自由とは何かという問題を永久に問い続けるという厳しい姿勢を作家は自らに課したのである。

石川淳にとつて、書き続けることは、刹那の夢に終始するような革命ではなく、持続する革命のための営為であり、文学的であると同時に、政治的な実践でもあったのである。

(いとう ひより)